

## 石狩川河口に於けるサケ地曳網漁回顧

2

はじめに

石狩市本町地区はそのむかし「サケに始つてサケで栄えた街」として知られていた。しかし時代の推移によつて街の中心は花畔、樽川（花川）地区に移り、今日では弁天歴史通りや石狩浜海水浴場などで、温泉施設などを中心とする観光街となり訪れる人々の憩いの地と変貌している。

今日、鮭漁は海面に於ける定置網漁の一漁法のみによつて操業されているが、昭和三〇年までには、石狩川の内水面漁が行われておりこの漁法のほかに、地曳網、流網、刺網三漁法が行われていた。今回本稿で取上げる地曳網漁は、内水面鮭流網、刺網漁禁止後も石狩川内水面のサケ孵化事業のため五場所の地曳網が認められ、昭和四〇年まで継続した漁法である。その後、平成一四年北海道遺産石狩川歴史・文化伝承事業としてホリカムイで復活した。この漁法は江戸時代から続く伝統漁であり、石狩の風物詩として觀光的にも有名で親しまれてきたものであることから、そのうちの大正期以降の漁の概要について述べることにしたい。

### 一 漁業の名称

石狩川鮭曳網漁

### 二 漁獲物の種類

### 三 鮭

### 四 漁業免許

鮭特別定第〇〇号北海道庁

### 四 漁業期間

走り漁<sup>アラシヨリ</sup>　自九月一日　至一〇月三一日  
後取り漁<sup>ヒトリヨリ</sup>　自一一月一五日　至一一月末日

### 五 操業場所 石狩川

大正後期から昭和三〇年まで

#### 一 ヤウスバ場所

廃止 昭和初期

#### 二 上質亭<sup>カミチ</sup>

廃止 昭和六年頃

#### 三 下質亭<sup>シキチ</sup>（渡船場上）

廃止 昭和一三年

注 昭和一五年～同一年まで地曳網名義で日中、一隻の磯舟で流網漁を行う。

四 昭和三〇年前半、漁組内に共同組合設立して地曳網漁一ヶ統再開。四年で中止。

#### 五 若生場所（渡船場下）

廃止 昭和一五年

#### 六 堀神威場所（呼称ホリカモイ）

廃止 昭和三〇年

#### 七 来札場所（中州）

廃止 大正末期

注 左岸昭和七・八年頃再開したこともある。

#### 七 燈台下場所

廃止 昭和四年頃

3

## 八 業場所

明治後期

4

### 六 漁具の状況

これについては、漁場（川幅・水流・流れの強弱）によって、網丈・長さに相違あり。

本項では堀神戸を基準とする。

昭和一〇年代

地曳綱漁は出綱、袋綱（スド）、入綱（他出綱・入綱）からなる全長一五二尋（三三八メートル）によって構成されている。一脇即ち袋綱に連接するところの網丈は、七尋（一〇・五メートル）、袋綱（スド）は太三本子、一寸八分（八・四センチ）長さ八尋三尺（二二・九メートル）袋底に魚を追いつめて開放するため先端を網（ロープ）で結び、その網を一〇尋（一五メートル）程度として、その最先端浮子にを付ける。袋綱の位置に高帽子型の浮子（神威浮子）を付け目印とする。（曳綱の中心を一日で判別出来るため）

#### 一 出綱

長さ五六尋（八四メートル）、網丈七尋（一〇・五メートル）河水の増水によって一脇部をはずす。

- (一) 一脇、本三本子、三寸目（九センチ）長さ一四尋（三六メートル）
- (二) 一脇、太三本子、四寸目（一一センチ）長さ三三一尋（四八メートル）
- ① あは浮子たな手綱 径五分（一・五センチ）のロープ。
- ② メタクリ 径一分五厘（〇・四五センチ）麻糸。割の巻きを入れ上と同じ長さにする。

(3) 沈子手綱 手綱径五分五厘（一・六五センチ）のロープ。

(4) 浮子（昭和一〇年代、横町加賀橋屋で作成）

木製（櫛松）長さ一尺四寸（四一センチ）幅四寸（一一センチ）厚さ、中真一寸四分（四・一センチ）両端五分（一・五センチ）その両端に穴を開け「アハ」をこれに通して浮子手綱に結びつける。

一脇は八寸（一四センチ）間に隔て、一枚付ける。一脇は九寸（一七センチ）一尺一寸（三六センチ）に一枚付ける。

#### (二) 沈子手綱の沈子

綱足は輪製で一個、量目一五匁（〇・九キロ）を一脇八寸（一・四センチ）間隔に一個、一脇は一尺（三〇センチ）間に一個を付ける。

#### (三) 立綱

綱径三分（〇・九センチ）の麻縄。長さ四尋（六メートル）を用いる。

長さ三尋（四・五メートル）で浮子手綱に連なる、下綱は径六分のロープで長さ五尋（七・五メートル）沈子手綱に連なる。この量綱を「ツボ」に含む。

#### 二 入綱

長さ九六尋（一四四メートル）網丈七尋（一〇・五メートル）

- (一) 一脇から四脇まであり、長さ夫々一四尋（三六メートル）綱目、一脇太三本子三寸目（九センチ）、一脇太三本子、四寸目（一一センチ）、三脇、四脇共三本子、五寸目（一五セン

5

チ) とする。

- ① 漢子手綱 径五分（一・五センチ）のロープ。
- ② 沈子手綱 径四分（一・二センチ）のロープ。
- ③ メタクリ 径一分五厘（〇・四五センチ）の麻糸。

一部の省略を入れて上下共同じ長さにする。

注 河水の増水で三・四脇をはずす。

- ④ 漢子 出綱と同じ。

#### (一) 經足 鉛製、量目 一個 一五匁（九四グラム）

一脇は八寸（二四センチ）間隔に一個、二脇は一尺（三〇センチ）、三・四脇は一尺一寸（三六センチ）間隔に一個を付ける。

#### (二) 出綱・入綱の附属用具

- ① キンタマ石

量目 一貫目（二・七五キロ）位の自然石を茎綱またはロープで巻き増水時や干潮時に沈子手綱に付け綱の流れを調節する。

- ② チン（チエーンの錠）

鎖用の鎖。各脇に二～五個。増水時沈子手綱につけ手綱の捩れを防ぐ。

- ③ カラップ（カラア。アイス語。さわる、触れるの意）

沈子手綱が捩れないために、三尋（四・五メートル）に一個の郭り合に付ける。（特に増

#### 水時)

材質と作り方 材質 アドー革またはイタヤの若木。三〇センチ位の振じて輪を作る。

作り方 炎火をし、周囲に棒を円形にして若木を熱して丸く輪を作る。

- ④ ナテワラ 摺裏

沈子手綱が河底で障害物や砂泥底に棘り込まれないように（河底を滑りやすいようにするため）「藁」で被う。増水時にも取り付ける。

二 出綱 径六分（一・八センチ）のロープ 長を一〇尋（三〇メートル）、時には少しあはらひがある。

直径六分（一・八センチ）のロープ 長を一〇尋（三〇メートル）、時には少しあはらひがある。

## 「石狩川鮭漁」の図観見

以下に述べるのは、北海道大学フィールド科学センター植物園所蔵「石狩川鮭漁」の図（図10）を石狩川河口鮭漁に携わった元漁師の目で見たものである。そのため、漁業史の専門家から見ると異なる見解があるかもしれない。あくまでも石狩川鮭漁に携わった者の解釈としてご理解いただきたい。

### 一 全体の構成と遠景

この絵を見ると石狩川河口の風景を背景に、海浜での鮭地曳網漁が描かれているように感じた。その理由は後で述べる。最初に遠景について述べ、次に近景について触れる。

遠景に描かれた山並みは、左岸の本町地区からの風景が描かれてる様子。山間は樺戸山地のピンネシリ（1100メートル）を中心に右に伴根山（1001メートル）隣根尾山（971メートル）左に神居尾山（948メートル）と思われる（図10）。

遠景中央の船三隻は、川右岸来札（ライサツ）の漁場。左岸の三半船三、磯舟一があるのは、左岸のトクビタにあった漁場で、堀根威（ホリカムイ）付近（現本町地区仲町付近）ではないか。河岸から少し上がりたところに灌木のやうなものが茂っている。右岸側はカシワだらうが、左岸側の河口近くにカシワ林はない。ヤナギかハマナスだらうが。

遠景中央に船前船二隻見えるのは石狩川河口と思う。従つて手前が上流。上段は鳥瞰図の様に見える。

### 二 所謂河川地引網漁の様子

下段絵・近景は、海浜漁の様子と思料する。二つに区切つて摘要を述べる。

#### ① 右絵。画面向かって右側部分。

地引網が手縄り上がり。大網を清め（さやめ・ここでは鮭の選別作業）、漁夫が板倉（塙切場）に運ぶ様子（図11）。その左側では一人の漁夫が左手で網を清り（さとり・修繕）ている。三半船の艤では、船頭らしい人が體櫂を立てて持つて立つ。

高い四角中の柱には、一面に「札幌縣鷹七里石狩郡石狩驛」もう一面には「樺路驛江三里武智毛町 銀函驛江五里拾町」とある。駅逕の標柱である。



図10 「石狩川鮭漁」の図

この標柱を抜んで一人は鮭を顔に当て、他の一人は歌舞伎役者のように手を振つてゐる舞振りは、鮭の大漁を喜んでいる漁夫の姿と作業の様子が表現されたものと思われる。ぐるぐるを巻いてゐるようには見えるのは、引き網の入れ網か。ただし、河川漁の入網は、やつう七〇尋（一〇五メートル）で、描かれている網は長すぎます。

手前に帽子を被り棒を持つてゐる人物は羅卒（明治時代の警察官）。海辺に手を広げ、漁舟の前に二人立つてゐる人は服装からアイヌと思料する。

## ② 左縄。網を引いてゐる図

撲わつてゐるのは漁夫一人。真く描かれているように思つたが、網の左右の人数がほぼ同数となつてゐる。実際は網の上部（アバタナ）は軽く、網の下部（アシタナ）が重い（錐がついてゐる）。そのため下部に多くの人数がつく。地曳網は、中央（袋網の入り口）にある「神威浮子（カモイタシニア）」から右側を入網（うりあみ）、左側を出網（であみ）とい

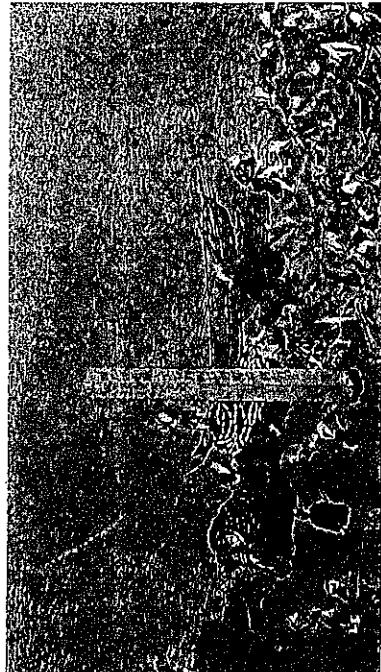


図 11 鮭の清り（選別）

う。その先端につくのが入網側は入網（うりづな）、出網側を出網（であな）といふ（図12）。この絵は入網を手繰つてゐるところと思つたが、網は川の中で途切れどこにも繋がつていはない。網の先にいる漁舟の一人が、水中に手を入れてゐるが、網の引き具合を見えてゐるか、袋網の状態も見えてゐるのか（図14）。あるいは、神威浮子を引き上げて袋網に鮭を入れようとしているのかもしれない。に漁舟の前が白くなつており、網に入つた鮭がはねてゐる様子を表現してゐるのだろう。

しかし、この漁舟から出た入網は、この絵の網にはつながらず、岸に向かつて消えていく。網につながつていれば、地引網の最後の段階の絵になるのだが。

その左側に描かれているのは全く別な動作で、引き上げられた網を整理してゐる様子である（図13）。ただし、これも河川漁としては

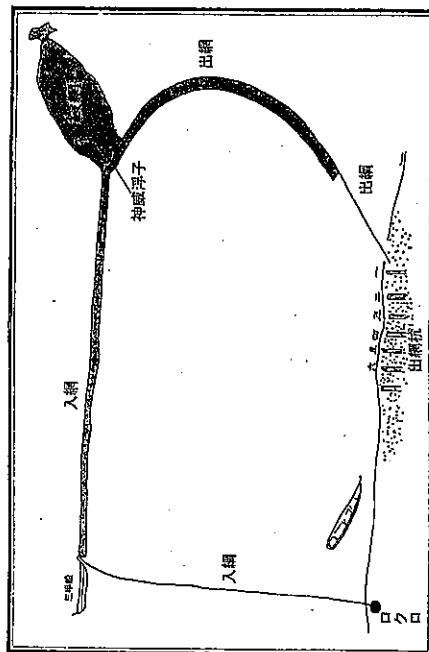


図 12 河川での地曳網漁（北海道水産協会編 1935年改訂）

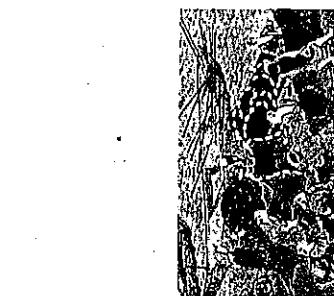


図13 浮子手綱 (アバタチ)



図14 神威浮子 (カムイダンブ)



図15 ロクロ口での巻き取り

6

網が長すぎる。一日に一二一五河(回)も引網をするので、網を引いたそばから船に積んで、次の漁の準備をする。船にあるように陸で網を山にしているのは、網が長く漁の回数が少ない海浜漁の様子ではないか。

### ③ 人網をロクロ口で巻いている図

網掛け船(三半船)で渾合に網をかけ、ロクロ口で巻いている。10人いるが、河川漁としては多い。網が短い河川漁では六十七人で充分(図15)。

ロクロの横で一人の漁夫がロートを手縫っているが、これは捨て取りといふ。ロクロに一一三廻りしてロートを手縫っているが、一人専門にロートを手縫る捨て取りがないなければタップ網は上がっていない。網は、磯舟につながり、さらに磯舟から岸につながっている。実際の作業を良く見えて描かれている。

ロクロ左の一隻の船(三半船)は網掛け船。長い棒状のものは手櫂。一一一四人で揃く。二隻の船の艦は夫々、一本の桟が立っているが、先端に「ウタ」(櫂の握りの部分)がついているところから櫂櫂と思われる。状況から船が動搖しないように立て固定しているように見えるが、自分の経験ではこのようにするとはない(図16)。また、船が川に上げられているが、川であれば、このようにするにはない。船の底を下ろして泊めるだけである。岸に上げるのは港湾でのやり方に見える。

鮭漁は九月～十月～十一月であり、カモメがこのように高止りするとはない。リシン漁期には(四月～五月)には高止りする。その時は時代。

鮭を釣っている人がいるが石狩浜(川面)は産卵に遡上するので餌はとらない。従って、他の海域では昔から釣れるが石狩浜では釣れない(図17)。

戦後、進駐軍の将校が石狩にヨットハーバーを作った。自分は警備補助員という名前で、米軍将校についたが、この将校は、鮭を釣ろうとした



図16 船の櫂櫂



図17 鮭を釣る人

7

た。自分は船が翻れないと忠告したが、「俺はミシシッジ川で鮭を釣った。(だから石狩でも釣れる)」と聞かなかつた。やはり一匹も釣れなかつた。絵はウケイではないか。画面中央に、釣竿を持つ子供が描かれているが、連れの子供は桶をもつており、これはウケイでよいだらう。でも、先の絵は鮭である。あるいは未成年のサケかも知れない。荷を抱きコウモリ傘を持っているのは旅行者か行商か。行商にしては荷物が少ない。

右側に手皮の胴着のようなものを着た轡を結んでいる男が見える。漁の監督だらうか。その他にも轡を結っているように見える人物が何人もいる。敷巻腕刀令は、明治四年で発布で、明治一〇年代になつても轡のある人がいたのだらうか(図18)。

#### ④ 川中の漁

川中に何艘も船が描かれているが、それぞれ異なる作業をしているよう見える(図19)。

ア 画面右側端の三半船は、網掛け(網を仕掛けること)をしていると思われる。地曳網をおこなう際、網の一方から出た網を岸に打つた杭(出綱桟)に固定し、出網、袋網、入網の順に網を張る。この三半船の後が少し白く波立っているが、これは、岸につながった網を引つ張っているものと見られる。

イ 次の機船には、駅通りの橋柱付近から網が出て、ロクロにつながつてある。機船の場所に袋



図18 轡のある人物

8

網があるのだろう。岸につなげる出網は、網を巻き取るにしたがつて、ロクロに近い位置を立てる。イの網掛けの次の段階の状態である。

ウ ロクロの右側には、網を引いている様子が描かれている。地曳網の最後の段階である。ただし、既に書いたが、この網は出網側が磯舟にもどりにもつながつていないおかしな状態である。

岸に立っている人物が、両手を上げて川に向かつて何か叫んでいるように見える。こいつした作業は見たことがない。岸に上がりつくる鮭を網に向かつて追いかけていっているのだらうか。

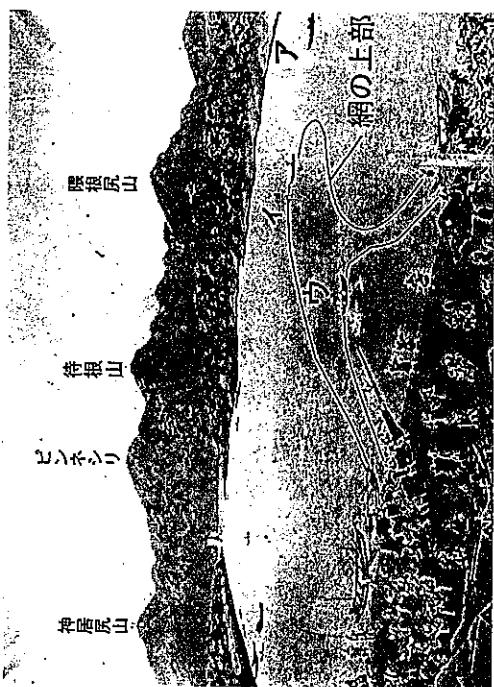


図19

9

### 三 「石狩川漁港」の図の虚実

全体として見ると、一枚の絵で網掛け、曳網の一連の作業を描いており大変重なもの。個々の作業についても良く理解して描けている。しかし、絵なるが故に若干誇張があると思う。

#### ① 網の数

絵の中には、網掛け、網引きなど異なる作業をする網が三本描かれているが一ヶ所の漁場で、同時にこの三つの作業をするとはない。一連の作業を示すための演出だらう。

#### ② 網の規模

最初に見たときに漁港の様子が描かれているのではないかとの印象を持った。

## 石狩川河口に於けるサケ地曳網漁回顧

### はじめに

石狩市本町地区はそのむかし「サケに始つてサケで終えた街」として知られていた。しかし時代の推移によつて街の中心は花畔、樺川（花川）地区に移り、今日では弁天歷史通りや石狩浜海水浴場あそびーち、温泉施設などを中心とする觀光街となり訪れる人々の憩いの地と変貌している。

今日、鮭漁は海水面に於ける定置網漁の一漁法のみによつて操業されているが、昭和三〇年までには、石狩川の内水面漁が行われておりこの漁法のほかに、地曳網、流網、刺網三漁法が行われていた。今回本稿で取上げる地曳網漁は、内水面鮭流網、刺網漁業止後も石狩川内水面のサケ孵化事業のため五場所の地曳網が認められ、昭和四〇年まで継続した漁法である。その後、平成一四年北海道遺産石狩川歴史・文化伝承事業としてホリカムイで復活した。この漁法は江戸時代から続く伝統漁であり、石狩の風物詩として觀光的にも有名で親しまれてきたものであることから、そのうちの大正期以降の漁の概要について述べることにしたい。

### 一 漢業の名称

石狩川鮭地曳網漁

### 二 漢獲物の種類

### 鮭

### 三 漢業免許

鮭特別定第〇〇号北海道庁

### 四 操業期間

走り漁<sup>自九月一日</sup>至一〇月三一日  
後取り漁<sup>自一一月一五日</sup>至一二月末日

### 五 操業場所 石狩川

大正後期から昭和三〇年まで

### 一 ヤウスバ場所

廢止 昭和初期

### 二 上真寧<sup>（上りきのね）</sup>

廢止 昭和六年頃

### 三 下真寧<sup>（下りきのね）</sup>（渡船場上）

廢止 昭和一三年

注 昭和一五年～同一八年まで地曳網主義で日中、一隻の漁舟で流網漁を行つ。

### 四 若生<sup>（わいお）</sup>場所（渡船場下）

廢止 昭和一五年

### 五 順威<sup>（じゅんゐ）</sup>場所（呼称ホリカモイ）

廢止 昭和三〇年

### 六 采札<sup>（さとり）</sup>場所（中州）

廢止 大正末期

注 左岸昭和七・八年墮再開したこともある。

### 七 燕合下場所

廢止 昭和四年頃

## 六 漁具の状況

これについては、漁場（川幅・水流・流れの強弱）によって、綱丈・長さに相違あり。

本項では福神漁場を基準とする。

昭和一〇年代

地曳綱漁は出綱、袋綱（スド）、入綱（他出綱・入綱）からなる全長一五二尋（一一一八メートル）にして構成されてくる。一脇脛から袋綱に連接する部分の綱丈は、七尋（一〇・五メートル）、袋綱（スド）は太三本子、一寸八分（八・四センチ）長さ八尋三尺（一一・九メートル）袋底に魚を追いつめて開放するため先端を綱（ロープ）で結び、その綱を一〇尋（一五メートル）程度として、その最先端浮子にを付ける。袋綱の位置に意幅子型の浮子（神威浮子）を付け目印とする。（東綱の中心を一日で判別出来るため）

## 一 出綱

長さ五六尋（八四メートル）、綱丈七尋（一〇・五メートル）河水の増水によりて一脇部をはずす。

- (一) 一脇、本三本子、三寸目（九センチ）長さ一四尋（一一六メートル）
- (二) 一脇、太三本子、四寸目（一一センチ）長さ一一尋（一八メートル）
- ① あは浮子たな手綱 径五分（一・五センチ）のロープ。
- ② メクリ 径一分五厘（〇・四五センチ）麻糸。一輪の荷せを入れ土に共回し長さにする。

③ 沈子手綱 手綱径五分五厘（一・六五センチ）のロープ。

④ 浮子（昭和一〇年頃、横町加藤橋屋で作成）

木製（楳材）長さ一尺四寸（四一センチ）幅四寸（一一やハチ）厚さ、中真一寸四分（四・一センチ）両端五分（一・五センチ）その両端に穴を開け「アベ」をひねり通して浮子手綱に結びつける。

一脇は八寸（一一四センチ）間に隔て、一枚付け、一脇は九寸（一七センチ）一尺二寸（三六センチ）に一枚付ける。

## (三) 沈子手綱の沈子

綱足は鉛製で一個、量目一五匁（〇・九キロ）之を一脇八寸（一・四センチ）両脇に一個、一脇は一尺（三〇センチ）間に一個を付ける。

## (四) 立竿綱 径三分（〇・九センチ）の麻縄。長さ四尋（六メートル）を用いる。

長さ三尋（四・五メートル）で浮子手綱に連なり、下綱は径六分のロープで長さ五尋（七・五メートル）沈子手綱に連なる。この量綱を「ツボ」に合す。

## 二 入綱

長さ九六尋（一四四メートル）綱丈七尋（一〇・五メートル）

- (一) 一脇から四脇まであり、長さ夫々一四尋（一一六メートル）綱目、一脇太三本子三寸目（九センチ）一脇太三本子 四寸目（一一やハチ）三脇 四脇太三本子 五寸目（一五セン

チ) とする。

- ① 浮子手綱 径五分(一・五センチ)のロープ。
- ② 沈子手綱 径四分(一・一センチ)のロープ。
- ③ メタクリ 径一分五厘(〇・四五センチ)の麻糸。

一側の著せを入れて上下同じ長さとする。

注 河水の増水で三・四脇をはずす。

- ④ 浮子 出綱と同じ。

#### (口) 綱足 鉛製 量目 一個 一二五枚(九四グラム)

一脇は八寸(二四センチ)間に一ヶ、二脇は一尺(三〇センチ)、三・四脇は一尺一寸(三六センチ)間に一ヶを付ける。

#### (目) 出綱・入綱の附属用具

- ① キンタマ石

量目 一貫目(三・七五キロ)位の自然石を先綱またはロープで巻き増水時や干潮時に沈子手綱に付け綱の流れを調節する。

- ② チン(チエーンの鉤)

錨用の鎖。各脇に二~五個。増水時沈子手綱につけ手綱の振れを防ぐ。

- ③ カラシア(カラブ)アイス語。さわる、触れるの意)

沈子手綱が振れないために、三尋(四・五メートル)に一個の割り合に付ける。(特に増

#### 水時)

材質と作り方 材質 ブドウ蔓またはイタヤの若木。三〇センチ位の揉じて輪を作る。

作り方 炎火をし、周囲に棒を円形に立て若木を熱して丸く輪を作る。

- ④ ナテワラ 摺輪

沈子手綱が河底で障害物や砂泥底に漬り込みながらうつに(河底を滑りやすいうつにするため)「蔓」で被つ。増水時にも取り付け。

一〇センチ位に束ねて、四・五メートル量をに沈子手綱に巻き付ける。

#### 三 出<sup>ア</sup>綱

径六分(一・八センチ)のロープ 長さ一〇尋(三〇メートル)、時にはワイヤーを使用する。

## 「石狩川鮭漁」の図鑑見

2

以下に述べるのは、北海道大学フィールド科学センター植物園所蔵「石狩川鮭漁」の図（図10）を石狩川河口鮭漁に携わった元漁師の目で見たものである。そのため、漁業史の専門家から見ると異なる見解があるかもしれない。あくまでも石狩の鮭漁に携わった者の解釈としてご理解いただきたい。

### 一 全体の構成と遠景

この絵を見ると石狩川河口の風景を背景に、海浜での鮭地曳網漁が描かれているように感じた。その理由は後で述べる。最初に遠景について述べ、次に近景について触れる。

遠景に描かれた山並みは、左岸の本町地区からの風景が描かれてる模様。山間は樺戸山地のピンネシリ（1100メートル）を中心に右に待根山（1001メートル）・躰根尻山（971メートル）左に神居尻山（948メートル）と思われる（図10）。

遠景中央の船三隻は、川右岸来れ（ライヤツ）の漁舟。左岸の川左岸（岩井一<sup>住</sup>）付近には、左岸のトクビタにあつた漁場で、蝦夷威（ホリカムイ）付近（現本町地区仲町付近）ではないか。河岸から少し上がつたところに灌木のようなものが茂つていて、右岸側はカシワだろうが、左岸側の河口近くにカシワ林はない。ヤナギかハマナスだろうか。

遠景中央に帆航船二隻見えるのは石狩川河口と思う。従つて手前が上流。上段は鳥瞰図の様に見える。

### 二 所謂河川地曳網漁の様子

下段絵・近景は、海浜漁の様子と思われる。一つに区切つて摘要を述べる。

#### ① 右絵。画面向かつて右側部分。

地曳網が手縫り上がり。大網を清め（さやめ・こじて）鮭の選別作業）、漁夫が板倉（塩切場）に運ぶ様子（図11）。その左側では一人の漁夫が左手で網を清り（きらり・修繕）している。三半船の體では、船頭らしい人が櫓櫛を立てて持つていて。

高い四角中の柱には、一面に「札幌縣七里石狩郡石狩村石狩驛」もう一面には「篠路驛江三里大拾苦町 銀閣驛江五里宿町」とある。駅逓の標柱である。



図10 「石狩川鮭漁」の図

3

この標柱を探して一人は鮭を顔に当て、他の一人は歌舞伎役者のように手を振つてゐる漁振りは、鮭の大漁を喜んでいる漁夫の姿と作業の様子が表現されたものと思われる。じぐろを巻いてゐるよう見えるのは、引き網の入れ網か。ただし、河川漁の入れ網は、かつらじ〇尋（10.5メートル）で、描かれている網は長すぎると。

手前に帽子を被り棒を持つてゐる人物は羅卒（明治時代の警察官）。海辺に手を広げ、磯舟の前に二人立つてゐる人は服装からアイヌと思われる。

#### ② 左縫。網を引いてゐる図

描かれてゐるのは漁夫一人。良く描かれているようには思うが、網の左右の人数がほぼ同数となつてゐる。実際は網の上部（アバタナ）は軽く、網の下部（アシタナ）が重い。（鮭がついてゐる）そのため下部に多くの人数がつく。地曳網は、中央（縄網の入り口）にある「神威浮子（カモイタシブ）」から右側を入網（ひりあみ）、左側を出網（であみ）とい

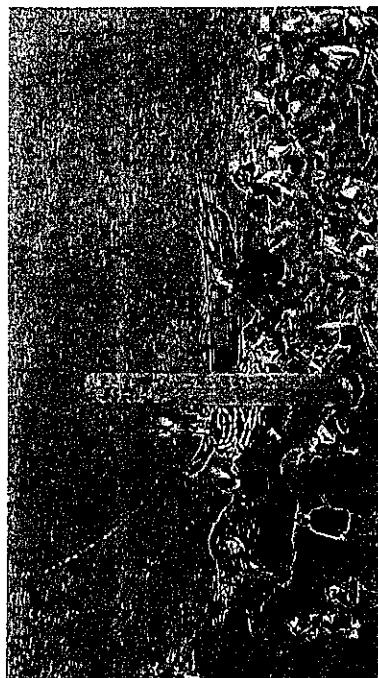


図11 鮭の清り（墨別）

う。その先端につくのが入網側は入網（ひりづな）、出網側を出網（であみ）といつ（図12）。この絵は入網を手縫つてゐるところと思うが、網は川の中で途切れどきにも繋がつていはない。網の先にいる磯舟の人が、水中に手を入れてゐるが、網の引き具合を見てゐるか、縄網の状態も見てゐるのか（図14）。あるいは、神威浮子を引き上げて袋網に鮭を入れようとしているのかもしだれない。磯舟の前が白くなつておらず、網に入つた鮭がはねてゐる様子を表現してゐるのだろう。

しかし、この磯舟から出た入網は、この絵の網にはつながらず、岸に向かつて消えていく。網につながつていれば、地引網の最後の階段の絵になるのだが。

その左側に描かれてゐるのは全く別な動作で、引き上げられた網を整理してゐる様子である（図13）。ただし、これが河川漁としては

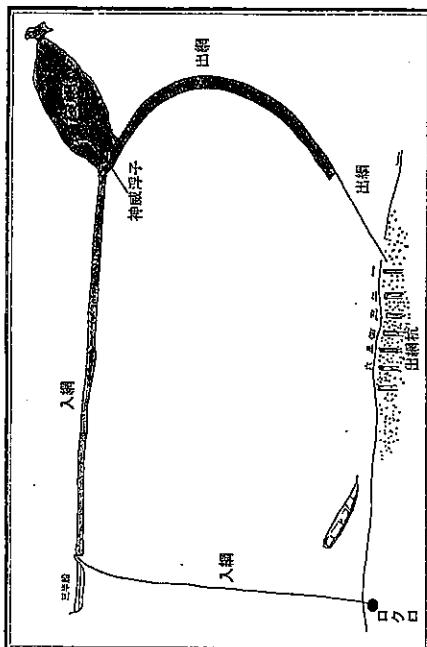


図12 河川での地曳網漁（北海道水産会報 1935 を改変）



図13 浮子手網 (アバタチ)



図14 神威浮子 (カムイダンブ)



図15 ロクロでの巻き取り

網が長すぎる。一日に二三回（回）も引網をするので、網を引いたそばから船に積んで、次の漁の準備をする。絵にあるように陸で網を山にしているのは、網が長く漁の回数が少ない海浜漁の様子ではないか。

### ③ 人網をロクロで巻いている図

網掛け船（三半船）で沖合に網をかけ、ロクロで巻いている。一人いるが、河川漁としては多い。網が短い河川漁では六七人で充分（図15）。

ロクロの横で一人の漁夫がロープを手繰っているが、これは捨て取りといふ。ロクロに二二回りしてロープを手繰っているが、一人専門にロープを手繰る捨て取りがいなければタップ網は上がりこまない。網は、磯舟につながり、さらに磯舟から岸につながつていて、実際の作業を良

く見て描かれている。

ロクロ左の二隻の船（三半船）は網掛け船。長い棒状のものは手櫂。二三回で搔く。二隻の船の艤は夫々、一本の櫂が立っているが、先端に「ウタ」（櫂の握りの部分）がついているところから櫂櫂と思われる。状況から船が動搖しないように立て固定しているように見えるが、自分の経験ではほとんどするんじゃない（図16）。また、船が川に上げられているが、川であれば、このようにするんじゃない。船の底を下ろして泊めるだけである。岸に上げるのは港浜でのやり方に見える。

鮭漁は九月～十月～十一月であり、カモメがこのように高上りするといとはない。二三ヶ月には（四月～五月）には高上りする。その時は時代。

鮭を釣っている人がいるが石狩浜（川面）は産卵に遡上するので鮭はどうない。従って、他の海域では昔から釣れるが石狩浜では釣れない（図17）。

戦後、進駐軍の将校が石狩にヨットハーバーを作った。自分は警備補助員という名前で、米軍将校についてたが、この将校は、鮭を釣ろうとし



図16 船の漁櫂

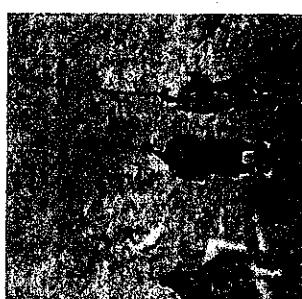


図17 鮭を釣る人

が。自分は絶対釣れないとも告じたが、「俺はミシシッピ川で鮭を釣った。(だから石狩でも釣れる)」と聞かなかつた。やはり一匹も釣れなかつた。絵はウケイではないか。画面中央に、釣竿を持つ子供が描かれているが、連れの子供は桶をもつており、これはウケイでよいだらう。でも、先の絵は鮭である。あるいは未成熟のサケかも知れない。荷を担ぐコウモリ傘を持つているのは旅行者が行商か。行商にしては荷物が少ない。

右側に毛皮の腰着のやつなものを持った髪を結っている男が見える。漁の監督だらうか。その他にも髪を結っているやつに見える人物が何人もいる。散髪刀今は、明治四年で発布で、明治一〇年代になつても髪のある人がいたのだろうか(図18)。

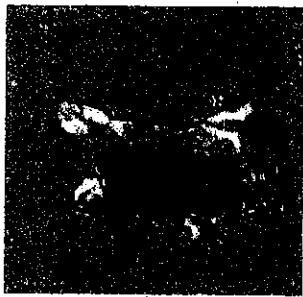


図18 髮のある人物

#### ④ 川中の漁

川中に何艘も船が描かれているが、それぞれ異なる作業をしてしまつて見える(図19)。

ア 画面右側端の三半船は、網掛け(網を仕掛けている)をしてしまつて思われる。地曳網をおこなう際、網の一方から出た網を岸に引いた先(出網点)に固定して出網、曳網、入網の順に網を張る。この三半船の後が少し白く旗立っているが、これは、岸につながつた網を引つ張つているものと見られる。

イ 次の機船には、駅邊の標柱付近から網が出て、ロクロにつながつていている。機船の場所に棊

網があるのだろう。岸につなげる出網は、網を巻き取るにしたがつて、ロクロに近い位置を変えてゆく。イの網掛けの次の段階の状態である。

ウ ロクロの右側には、網を引いている様子が描かれている。地曳網の最後の段階である。ただし、既に書いたが、この網は出網側が機舟にもといひにもつながつていないおかしな状態である。

岸に立っている人物が、両手を上げて川に向かつて何か叫んでいるように見える。こうした作業は見たことがない。岸に上がりつくる鮭を網に向かつて追い返しているのだろうか。

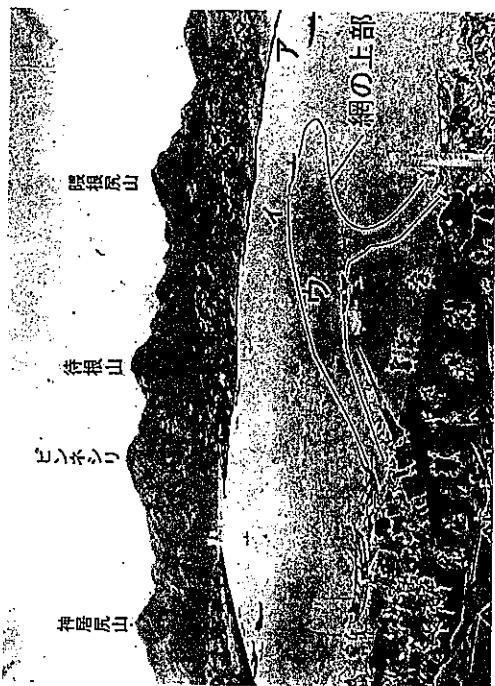


図19

### 三 「石井川漁業」の図の虚実

全体として見ると、一枚の絵で網掛け、曳網の一連の作業を描いており大変貴重なもの。個々の作業についても良く理解して描けている。しかし、絵なるが故に若干誇張があると思つ。

#### ① 網の数

絵の中には、網掛け、網引きなど異なる作業をする網が二本描かれているが、一ヶ所の漁場で、同時に二つの異なる作業をするわけではなく、一連の作業を示すための演出だらう。

#### ② 網の規模

最初に見たときは漁網の様子が描かれているのではないかとの印象を持った。

## 石狩川河口に於けるサケ地曳網漁回顧

2

### はじめに

石狩市本町地区はそのむかし「サケに始つてサケで終えた街」として知られていた。しかし時代の推移によつて街の中心は花畔、横川（花川）地区に移り、今日では弁天歴史通りや石狩浜海水浴場などビーチ、温泉施設などを中心とする観光街となり訪れる人々の憩いの地と変貌している。

今日、鮭漁は海面に於ける定置網漁の一漁法のみによつて操業されているが、昭和三〇年までは、石狩川の内水面漁が行われておりこの漁法のほかに、地曳網、流網、刺網三漁法が行われていた。今回本稿で取上げる地曳網漁は、内水面鮭流網、刺網漁禁止後も石狩川内水面のサケ孵化事業のため五箇所の地曳網が認められ、昭和四〇年まで継続した漁法である。その後、平成一四年北海道遺産石狩歴史・文化伝承事業としてホリカムイで復活した。この漁法は江戸時代から続く伝統漁であり、石狩の風物詩として観光的にも有名で親しまれてきたものであることから、そのうちの大正期以降の漁の概要について述べることにしたい。

### 一 漁業の名称

石狩川鮭地曳網漁

### 二 漁獲物の種類

### 三 鮭

### 四 漁業免許

鮭特別定第〇〇号北海道庁

### 五 操業期間

後取り漁 <sup>走り漁</sup> 自九月一日 至一〇月三一日

操業場所 石狩川  
大正後期から昭和三〇年まで

一 上岸場所 ヤウスバ場所 廃止 昭和初期

二 上岸場所 <sup>上岸場所</sup> 廃止 昭和六年頃

三 下貯場 <sup>下貯場</sup> (渡船場上) 廃止 昭和一三年

注 昭和一五年～同一年まで地曳網名義で日中、一隻の機舟で流網漁を行う。

四 漁組内に共同組合設立して地曳網漁一ヶ統再開。四・五年で中止。  
昭和三〇年前半

五 岩生場所 (呼称ホリカモイ) 廃止 昭和一五年

六 札場所 (中州) 廃止 大正末期

注 左岸昭和七・八年頃再開したこともある。

七 燐台下場所 廃止 昭和四年頃

八 志美場所 廃止 明治後期

## 六 漁具の状況

これについては、漁場（川幅・水流・流れの強弱）によって、網文・長さに相違あり。  
本項では堀神威場所を基準とする。

昭和一〇年代

地曳網海は出網、袋網（スド）、入網（他出網・入網）からなる全長一五二尋（111メートル）  
によつて構成されている。一脇即ち袋網に連接するところの網文付けは、七尋（10.5メートル）  
袋網（スド）は太三本子、二寸八分（八・四センチ）長を八尋三尺（11.9メートル）袋底に魚  
を追いつめて開放するため先端を網（ロープ）で結び、その網を一〇尋（15メートル）程度と  
して、その最先端浮子にを付ける。袋網の位置に鳥帽子型の浮子（神威浮子）を付け目印とする。  
(東側の中心を一日で判別出来るため)

### 一 出網

長さ五六尋（八四メートル）、網文七尋（10.5メートル）河水の増水によつて一脇部をはずす。

(一) 一脇、本三本子、二寸目（九センチ）長を一四尋（三六メートル）

(二) 一脇、太三本子、四寸目（11.7センチ）長を三三尋（四八メートル）

① あわせ浮子たが手綱 径五分（1.5センチ）のロープ。

② メタクリ 径一分五厘（0.45センチ）麻糸。一割の寄せを入れ上下同じ長さにする。

③ 浮子手綱 手綱 径五分五厘（1.65センチ）のロープ。

(四) 浮子（昭和一〇年頃、横町加藤桶屋で作成）

木製（櫻松）長さ一尺四寸（四一センチ）幅四寸（11.7センチ）厚さ、中真一寸  
四分（四・二センチ）両端五分（1.5センチ）その両端に穴を開け「アバ」をこ  
れに通して浮子手綱に結びつける。

一脇は八寸（11.4センチ）間に隔て、一枚付け、一脇は九寸（11.7センチ）一尺  
一寸（三六センチ）に一枚付ける。

(五) 浮子手綱の浮子

網足は鉛製で一個、量目一五匁（0.9キロ）を一脇八寸（11.4センチ）間に隔て一個、  
一脇は一尺（三〇センチ）間に隔て一個を付ける。

(六) 筋繩 径三分（0.9センチ）の麻繩。長を四尋（六メートル）を用いる。

立綱 上綱は径六分（1.8センチ）のロープ。

長を三尋（四・五メートル）で浮子手綱に通なり、下綱は径六分のロープで長を五尋（七・  
五メートル）浮子手綱に通なる。この重綱を「ツボ」に名す。

### II 入網

長さ九六尋（144メートル）網文七尋（10.5メートル）

(一) 一脇から四脇まであり、長を米々一四尋（三六メートル）網目、一脇太三本子二寸目（九  
センチ）二脇太三本子 四寸目（11.7センチ）三脇 四脇共三本子 五十目（一五セ  
ンチ）とする。

① 浮子手綱 径五分（1.5センチ）のロープ。

② 沈子手綱 径四分（一・一センチ）のロープ。

③ メクグリ 径一分五厘（〇・四五センチ）の麻糸。

一側の荀せを入れて上下両同じ長さとする。

注 河水の増水で三・四脚をはずす。

④ 鮒子 出綱と同じ。

(口) 綱足 館類、量目 一個 二五匁（九四グラム）

一脇は八寸（二四センチ）間隔に一個、二脇は一尺（三〇センチ）、三・四脇は一尺二寸（三六センチ）間隔に一個を付ける。

(口) 出綱・入綱の附属用具

① キンタマ石

量目 一貫目（三・七五キロ）位の自然石を茎綱またはロープで巻き増水時や干潮時に沈子手綱に付け網の流れを調節する。

② チン（チエーンの通称）

錆用の鎖。各脇に二・五個。増水時沈子手綱につけ手綱の捩れを防ぐ。

③ カラニア（カラブ。アイヌ語。さわる、触れるの意）

沈子手綱が張れなくなるために、三尋（四・五メートル）に一箇の弱い合はせを作る。（特に増水時）

材質と作り方 材質 ブドウ蔓またはイタヤの若木。三〇センチ位の捩じて輪を作る。作り方 炎火をし、周囲に棒を円形に立て若木を熱して丸く輪を作る。

④ ナテワラ 摘葉

沈子手綱が河底で障害物や砂泥底に渦り込まれないように（河底を渦りやすいようにするため）「葉」で被う。増水時にも取り付ける。

一〇センチ位に束ねて、四・五メートル置きに沈子手綱に巻きつける。

三 出綱

径六分（一・八センチ）のロープ 長さ110尋（330メートル）。時にはワイヤーを使用するところもある。

## 「石狩川鮭漁」の図鑑見

以下に述べるのは、北海道大学フィールド科学センター植物園所蔵「石狩川鮭漁」の図(図10)を石狩川河口難漁に携わった元漁師の目で見たものである。そのため、漁業史の専門家から見る異なる見解があるかもしれない。あくまでも石狩の鮭漁に携わった者の解釈として理解いただきたい。

### 一 全体の構成と遠景

この絵を見ると石狩川河口の風景を背景に、海浜での鮭地曳網漁が描かれているように感じた。その理由は後で述べる。最初に遠景について述べ、次に近景について触れる。

遠景に描かれた山並みは、左岸の本町地区からの風景が描かれてる模様。山間は樺戸山地のシンネシリ(1100メートル)を中心右に待根山(1001メートル)、隣根尻山(971メートル)左に神居尻山(948メートル)と思われる(図10)。

遠景中央の船三隻は、川右岸来札(ライサツ)の漁場。左岸の三平船二、機舟<sup>(桂)</sup>一があるのは、左岸のトクビタにあつた漁場で、深浦威(ボリカムイ)付近(現本町地区付近)ではないか。河岸から少し上がつたところに灌木のようなものが茂っている。右岸側はカシワだろうが、左岸側の河口近くにカシワ林はない。ヤナギかハマナスだろうか。

遠景中央に帆前船<sup>(桂)</sup>三隻見えるのは石狩川河口と思う。従つて手前が上流。上段は鳥瞰図の様に見える。

見える。

### 二 所謂河川地引網漁の様子

下段絵・近景は、海浜漁の様子と思われる。二つに区切つて摘要を述べる。

#### ① 右縁

画面向かって右側部分。地引網が手縫り上がり。大網を清め(さやめ)ここでは鮭の選別作業、漁天が板倉(塙切場)に運ぶ様子(図11)。その左側では一人の漁夫が左手で網を清り(きより)修繕(しゆせん)している。三平船の艤では、船頭らしい人が櫓(よしろ)を立てて持つている。

高い四角中の柱には、一面に「札幌縣七里石狩國石狩郡石狩驛」もう一面には「篠路驛江三里武拾壹町鐵函驛江五里格町」とある。駅通の標柱である。



図10 「石狩川鮭漁」の図

この標柱を挟んで一人は鮭を額に当て、他の一人は歌舞伎漫者のように手を振つてゐる素振りは、鮭の大漁を賣んでゐる漁夫の姿と作業の様子が表現されたものと思われる。じくろを巻いているように見えるのは、引き網の入れ網か。ただし、河川漁の入網は、ふつう七〇尋(一〇五メートル)で、描かれてゐる網は長すぎる。

手前に帽子を被り櫂を持つてゐる人物は羅本(明治時代の警察官)。海辺に手を広げ、磯舟の前に二人立っている人は服装からアイヌと思料する。

#### ② 左縫。網を引いてゐる図

携わつてゐるのは漁夫一人。良く描かれてゐるようには思つたが、網の左右の人数がほぼ同数となつてゐる。実際は網の上部(アバタナ)は軽く、網の下部(アシタナ)が重い。(鮭がつけてゐる)そのため下部に多くの人数がつく。地曳網は、中央(袋網の入り口)にある「神威浮子(カモイダシブ)」から右側を入網(ひりあみ)、左側を出網

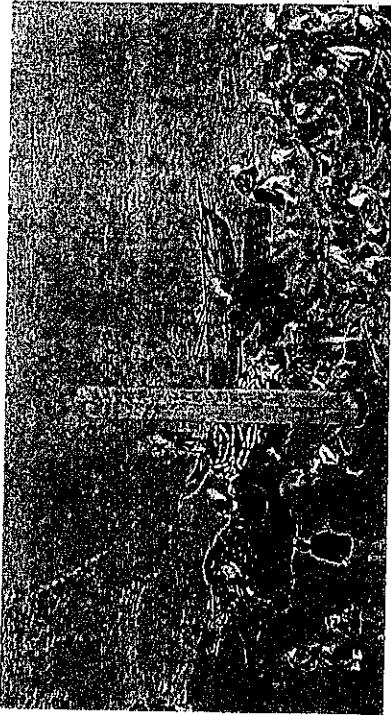


図11. 鮭の漁り(選別)

(であみ)といふ。その先端につくのが入網側は入網(ひりづな)、出網側は出網(でづな)といふ(図12)。この船は入網を手縫つてあることと思つたが、網は川の中で途切れどこにも繋がつてない。網の先にいる磯舟の一人が、水中に手を入れてゐるが、網の引き具合を見えてゐるか、袋網の状態も見えてゐるのか(図14)。あるいは、神威浮子を引き上げて袋網に鮭を入れようとしているのかもしれない。に磯舟の前が白くなつておらず、網に入つた鮭がはねてゐる様子を表現してゐるのだろう。

しかし、この磯舟から出た入網は、この絵の網にはつながらず、岸に向かつて消えている。網につながつていれば、地引網の最後の段階の網になるのだが。

その左側に描かれてゐるのは全く別な動作で、引き上げられた網を整理してゐる様子である(図13)。ただし、これも河川漁と

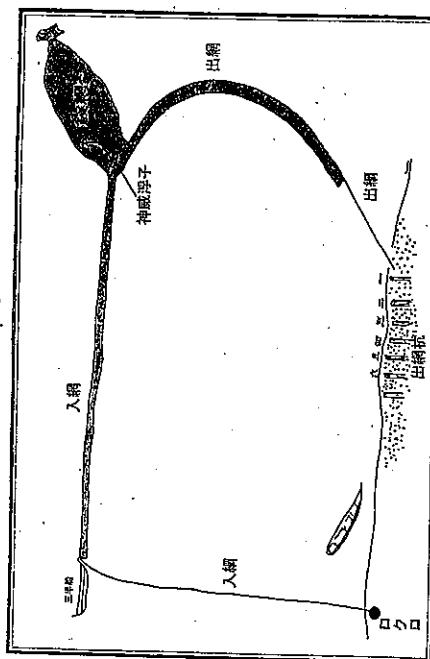


図12 河川での地曳網漁(北海道水産協会編 1935 を改変)



図13 浮子手網 (アバタチ)

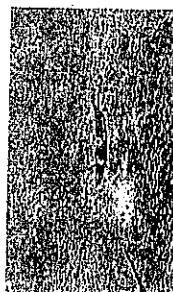


図14 袖威浮子 (カムイダンフ)



図15 ロクロでの巻き取り

6

しては綱が長すぎる。一日に二三一五回（回）も引綱をするので、綱を引いたそばから船に積んで、次の漁の準備をする。絵にあるように崖で綱を山にしているのは、綱が長く漁の回数が少ない海浜漁の様子ではないか。

### ③ 入綱をロクロで巻いている図

綱掛け船（三半船）で沖合に綱をかけ、ロクロで巻いている。10人いるが、河川漁としては多い。綱が短い河川漁では六七人で充分（図15）。

ロクロの横で一人の漁夫がロープを手縛つていて、これは捨て取らう。ロクロに二三廻りしてロープを手縛つているが、一人専門にロープを手縛る捨て取りがいなければダメ。綱は上がってこない。綱は、磯舟につながり、さらに磯舟から岸につながっている。実際の作業を良く見て描かれている。

ロクロ左の一隻の船（三半船）は綱掛け船。長い棒状のものは手縛。一一一四人で揃く。一隻の船の艤は天々、一本の棒が立っているが、先端に「ウタ」（縛の握りの部分）がついているところから縛と思われる。状況から船が動揺しないように立て固定しているよう見えるが、自分の経験ではこのようにするとはない（図16）。まだ、船が川に上げられているが、川であれば、このようにするとはない。船の碇を下ろして泊めるだけである。岸に上げるのは海浜でのやり方に見える。

鮭漁は九月～十月～十一月であり、カモメがこのように高上りするとはない。ニシン漁期には（四月～五月）には高上りする。その時は時代。

鮭を釣っている人がいるが石狩浜（川面）は蘆葦に週上するので餌は知らない。従って、他の海域では昔から釣れるが石狩浜では釣れない（図17）。

戦後、進駐軍の将校が石狩にヨットハーバーを作った。自分は警備補助員という名前で、米軍将校についたが、この将校は、鮭を釣ろうとした。自分は絶対釣れないと忠告したが、「俺はミシシッピ川で鮭を釣った。（だから石狩でも釣れる）」と聞かなかつた。やはり一匹も釣れなかつた。絵は



図16 船の碇



図17 鮭を釣る人

7



図18 畫のある人物

ウケイではないか。画面中央に、釣竿を持つ子供が描かれているが、連れの子供は櫂をもつておらず、これはウケイでよいだろう。でも、先の絵は鮭である。あるいは未成熟のサケかも知れない。櫂を担ぎコウモリ傘を持っているのは旅行者か行商か。行商にしては荷物が少ない。

右側に毛皮の胸着のようないもを着た櫂を結っている男が見える。漁の監督だろうか。その他にも櫂を結んでいるように見える人物が何人もいる。散撃脱刀令は、明治四年で發布で、明治一〇年代になつても櫂のある人がいたのだろうか（図18）。

#### ④ 川中の漁

川中に何艘も船が描かれているが、それぞれ異なった作業をしているように見える（図19）。

ア 画面右側端の三半船は、網掛（網を仕掛けけること）をしてしまふと思われる。地曳綱をおこなう際、網の一方から出た櫂を岸に打った杭（出綱杭）に固定し、出綱、袋綱、入綱の順に網を張る。この三半船の後が少し白く波立っているが、これは、岸につながつた櫂を引つ張つて、いるものと思われる。

イ 次の磯船には、駆逐の櫂柱付近から櫂が出て、ロクロにつながつてある。磯船の場所に袋綱があるのだろう。岸につなげる出綱は、櫂を巻き取るにしたがつて、ロクロに近い位置を変えてゆく。イの櫂掛の次の段階の状態である。

ウ ロクロの右側には、櫂を引いている様子が描かれている。地曳綱の最後の段階である。ただし、既に書いたが、この網は出綱側が磯舟にもどることにもつながっていないおかしな状態である。

岸に立っている人物が、両手を上げて川に向かつて何か叫んでいるように見える。こうした作業は見たことがない。岸に上がつてくる鮭を網に向かつて追いついているのだろうか。

#### 三 「石狩川鮭漁」の図の虚実

全体として見ると、一枚の絵で網掛、曳綱の一連の作業を描いており大変貴重なもの。個々の作業についても良く



図19

理解して描いている。しかし、絵が古が故に若干誇張があると感づる。

10

① 綱の数

絵の中には、網掛け、網引もなし異なる作業をする網が三本描かれてゐるが、一ヶ所の漁場で、同時に三つの異なる作業をするわけはない。一連の作業を示すための演出だろう。

② 綱の規模

最初に見たときに漁港の様子が描かれているのではならぬとの印象を持つた。